

心形容詞の歴史的研究

—「ねたし」について—

陳 崗 ・ 吉田 則夫*

平安時代の「ねたし」は、本来の「相手の仕打ちや行為、あるいは、相手の優れた様子に対して、自分の負け（相手の優越）を悟った時の痛切な怒りに似た心的状態」という意味とともに、平安中期頃に自分自身の失敗に対しても用いられるようになり、さらに、平安中期末から平安後期初頭には、連体修飾語として「ねたしと思われるくらい素晴らしい」という意味で用いられるようになるなど、次第にその意味を広げていった。中世に入ると、平安時代にあった意味を狭めながらも、一方では、相手の恵まれた状態にあこがれるようなニュアンスを持つようになる。また、「ねたまし」という語形も出現し始める。

Keywords : 心形容詞、ねたし、ねたまし、意味変化

はじめに

本稿は、日本人理解を目指した日本語研究の一環として、心情を表す形容詞の一分野を取り上げる。日本人は、自らの心的状態をどのように区別し、認識し分けているのか。それぞれの心的状態は、どのような事態に接したときに生じるのか。それは、時代をこえて変わらないものなのか、時代によって変化するものなのか。そして、日本人の心的状態の認識と中国人のそれは同じなのか違うのか。心情を表す形容詞を総合的に分析することによって、これらの問題についての指針が得られると考えられる。

本稿では、対人関係において生ずる心情を表す形容詞の中から、特に「ねたし」を中心に取り上げる。上代、中古から現代への意味変化の実態を明らかにするための一階梯として、まず上代、中古から中世における日本古典文学作品に使用された「ねたし」及びその関連語の用例を抽出し、その意味的特徴を明らかにし、また歴史的な意味変化の実態を明らかにする。

「ねたし」の意味について、石川徹氏は、次のように説かれている。^(注1)

○「ねたし」は自分の行為の失敗もあるが、どちらかといふと他律的な、他人からさふいふひどい目に遭はされるのであり、又、年月の長く続いた事の間違ひに気づいたといふやうな残念ではなく、もっと瞬間的、当座の腹

立ちについていふので、遊戯で負けたやうな些事の残念にも使用する。

○「ねたし」は自責よりも、相手なり外界なりに対して腹を立てるので、その気持の外向性が、くやしの内向性と背反する。

○「ねたし」は、「ねたむ」「ねたがる」「ねたます」（帚木卷の木枯の女の条の如き）等の同類の動詞があり、この中、今も「ねたむ」が嫉視羨望の義に使用されるやうに、(イ)他に対する競争意識から、負けるのを無念がつて腹を立てる場合と、(ロ)必ずしも相手はゐないが、周囲外界を意識して、自分の失策にみづから腹を立てる場合がある。

○「ねたし」の(イ)の場合は、「畜生！うまくしてやられた」とか、「残念無念！」というこちらの気持……

* 兵庫教育大学連合大学院博士課程言語系教育講座

岡山大学教育学部国語教育講座 七〇〇—八五三〇 岡山市津島中三—一一

The Historic Study of the Japanese Adjective of Emotions about "Netashi"

GANG CHEN and NORIO YOSHIDA

The Joint Graduate School in Science of School Education (Doctors Course),

Hyogo University of Teacher Education

Department of Japanese Language Education, Faculty of Education, Okayama

University, Tsushima-naka, Okayama 700-8530

○思はくがガラリとはづれた腹立たしさが、「ねたし」で、相手にさうした腹立たしさ・くやしき・じれったさを味ははせるやうに意地わるく振舞ふのが、「ねたげ」なのである。

この説によると、平安時代の「ねたし」は「他人からひどい目に合わされた時、相手に負けた時に、瞬間的に生ずる腹立たしく、不愉快な心的状態」と言えそうである。現代語の「ねたましい」の意味（めぐまれた物や状況にあこがれて、それを得ている者を憎悪する様子）とは、その意味を異にしている。

現行の国語辞典・古語辞典では、次のように語義記述される。

『日本国語大辞典』（第二版 小学館）

【妬・嫉】〔形ク〕〔反発を感じ、ねたましく思う気持ちを表わす〕

- ①他人の充足した状態をうらやんで、反感の気持を抱く。うらやましくねたましい。また、ねたましく思われるほど、すばらしい。
- ②特に男性に対して嫉妬の気持を抱く。ねたましい。
- ③自分の行為や選択が、思わしい結果を得られなくて、残念である。
- ④他人にうまうまとしてやられて残念だ。また、他人から見下げられてくやしい。

『古語大辞典』（小学館）

【妬し】（形シク）「な「名」いた（痛）し」の約で、相手の名（評判）が高くて、自分に痛く感じられるの意か。

- ①しゃくにさわる。憎らしい。
- ②残念だ。しまったと思う。悔やまれる。

【語誌】

中古和文では、瞬間的な当座の腹立ちについていう。これには、他への競争意識から負けるのを残念がって腹を立てる場合と、必ずしも相手がいないが自分の失敗に自ら腹を立てる場合とがある。

『古語大辞典』では、石川氏の説かれる「ねたし」の意味(イ)が①に対応し、意味(ロ)が②に対応しており、『日本国語大辞典』の記述では、意味③に対応している他、石川氏が説かれない①のような現代語の「ねたましい」の意味に当たる意味や、「ねたましく思われるほど、すばらしい」の意味、また、②のよきな意味も記述されている。

以下、上代から中世の文学作品に使用された「ねたし」の意味を分析し、「ねたし」の意味変化の実態について明らかにしていきたい。

第一節 上代・中古における「ねたし」の意味

上代の「ねたし」については、『万葉集』における次の例を見出したに過ぎない。

- 1、ほととぎす いと称多家口波 橘の花散る時に 来鳴きとよむる（巻第十八、四〇九二番歌）

「ねたけくは」とあるが、これは「ねたし」のク語法である。ほととぎすが癩に障るのは、橘の花が満開の時でなく散るときになって鳴きたることだ。という歌である。橘の花が散り始めて、惜しいことだと心悩ましているときにやって来て、ますます心を悩ませる。そんなほととぎすに対して「してやられた。参った」といった思いを抱いていると解釈される。

加点点代はくだるが、『日本書紀』の古訓にも「ねたし」の例が見られる。

2、有獻山猪。天皇指猪て詔曰、何時如断此猪之頸、断朕所嫌之人。多設兵仗有異於常。壬午蘇我馬子宿禰、聞天皇所詔て恐嫌於己。招聚儻者謀弑天皇。〔所嫌〕左傍に「ソネム」訓あり。「恐嫌」右傍の「タネムラン」は「ネタムラン」の誤写。「儻」左傍に「タムラヒト」訓あり。（巻第二十一、崇峻天皇、五年十月）

どうして崇峻天皇が蘇我馬子を「ねたし」と思ったのかは定かではないが、物部氏を滅ぼした後、政治の実権はほとんど蘇我氏の手中にあり、崇峻天皇は飾り物のような存在であったのであろう。事実、馬子が天皇を謀殺したとき、馬子は何等の処罰を受けないのである。崇峻天皇は、馬子の優越を痛切に感じていたと思われる。そんな天皇のことばとして「ねたし」が用いられたのである。

平安初期（八二三年）成立の『日本霊異記』訓釈には、動詞「ねたむ」の例

が見られる。

3、但馬国七美郡の山里の人の家に、嬰兒の女有りき。中庭に匍匐フときに、驚擄りて空に騰リテ、東を指して翳リイヌ。父母懇ヒテ、惻ミ哭き悲しび、追ひ求むれども、到る所を知らず。故、為に福を修せり。(上巻第九話、八二頁)

【訓釈】惻怛太美〔子タミ〕

4、女に問ふに答へて、『我実を知る。吾を償ヒて家より出遣るが故に、悽シミ惻ミ厭ひ媚ル』とまうす。(上巻第三十話、一一二頁)

【訓釈】惻怛太見〔怛多三〕

5、七かしらの牛聞きて、舌を嘗り唾を飲み、膾を切る効ヲ為し、宍を償ふ効を為し、慷慨ミテ刀を捧げて建て、各言はく、「怨を報いざらむや。我忘れざるべし。猶し後に報いむ」といふ。(中巻第五話、一五七頁)

【訓釈】慷慨子タミテ

例3は、驚によって、幼い娘を奪われた時の父母の思いを述べている。思いがけなくも驚にしてやられた時の感情を「ねたむ」で表現している。前後に「あからしぶ」(痛切に嘆く)、「哭き悲しぶ」という動詞が使用されていることから、「ねたむ」は、このような事態を引き起こした驚に対する腹立ちを表現していると考えられる。つまり、「してやられた。いまいましい驚め!」といった思いであろうか。例4は、夫によって家を追い出された女が、そのことによって夫を恨めしく、いまいましく、つらく思うと述べる場面である。夫の仕打ちに対する、いまいましく腹立たしい思いを「ねたむ」が表現しているのである。例5は、七頭の牛が、思いがけない閻羅王の判決によって無罪となった男に対する、いまいましく腹立たしい思いを表現している。「日本霊異記」の「ねたむ」は、このように、他から向けられた仕打ちに対して、「してやられた。いまいましい」といった腹立たしさを表現しており、相手の恵まれた状況にあらがれるといったニュアンスは感じられない。

例2も、崇峻天皇が馬子に対して、その恵まれた状況にあらがれを感じつつ、そんな馬子に憎悪の感情を抱くといった現代的な意味ではなく、常に天皇である自分を蔑ろにする馬子に対して、いまいましさを感じたと解釈できよう。

このように、相手の仕打ちに対して「してやられた」と感ずるのは、自分が相手に「負けた」と感ずることであり、それは、とりもなおさず相手の「勝ち」

「優越」を感ずることでもある。すなわち、「ねたし」とは、「相手の仕打ちによって、自分の負け(相手の優越)を悟った時の痛切な怒りに似た心的状態」と捉えることができそうである。

平安時代の文学作品に用いられる「ねたし」の例を見ると、右のように「してやられた」といった、「相手の仕打ちや行為に対して、自分の負け(相手の優越)を悟った時の痛切な怒りに似た心的状態」と解釈される例が多く見出される。

6、かぐや姫の言ふやう、「親のの給(ふ)ことを、ひたぶるにいな辞び申さんことのいとをしさに、取りがたき物を」。かくあさましく持て来たる事をねたく思ひ、翁は聞のうち、しつらひなとす。(『竹取物語』、三七頁)

7、明けぬれば、帯刀急ぎ参りぬ。少将、「いかゞいひつる」との給へば、「しかかくなんあこぎがいひし」と申(す)に、典薬助の事を、あさまし、ねたし、げにいかに侘しからむと、思ひやるもいとあはれなり。(『落窪物語』、一一九頁)

8、かの空蟬を、もののをりをりには、ねたう思し出づ。(『源氏物語』一、末摘花、三四〇頁)

9、いと御覽せさせまほしう侍りし文書きかな。人の隠しおきたりけるをぬすみて、みそかに見せて、とりかへしはべりにしかば、ねたうこそ。(『紫式部日記』、四九五頁)

10、「いかでこの人に、いとかくだけきと、また心のうちをだにつぶくと、言ひしらせて、気色をも見ばや。内のおとゝ大臣になびきはてなば、ねたう口をしきわざかな。いかに、かまへてうちしのびつ、さはなさず、わが物と見るわざをせばや」とのみ、つゆまどろまず、おぼ思しあかされて(『夜の寝覚』、二〇九頁)

11、箏の御琴引き寄せて、掻き合はせすさびたまひて、そそのかしきこえたまへど、かのすぐれたりけむもねたきにや、手もふ触れたまはず。(『源氏物語』二、漆標、二八三頁)

例6は、蓬萊の玉の枝を持参した、くらもちの皇子に対して、かぐや姫は「してやられた」と思うのである。例7は、落窪の君を犯そうとしている典薬助に対して少将が忌々しく思う場面である。これまでは、典薬助を撃退してい

るのであるが、落窪の君を深く思う少将にとっては、それまでの典薬助の行為が、落窪の君を傷つけ、自分が落窪の君を守ってやれなかったことを「負けた」と感じているのであろう。そして、「してやられた。いまいましい奴め」という腹立たしい気持ちになるのである。例8は、求愛を拒んだ空蟬に対して、源氏が「してやられた」といまいましく思うのである。例9、是非とも見せたいような手紙だったのを、ある人が密かに取って見せてくれたのではあるが、すぐ取り返されて、お目にかけれられないことになったという。せつかくの手紙を取り返されたことに対して、「してやられた」と、いまいましく思うのである。例10は、自分にちつとも靡いてくれないで内大臣に心を寄せる寢覚の上を帝がいまいましく思うのである。例11は、明石の君が箏の琴に優れていることに反発して、手も触れないという場面である。これまでの例と異なつて、相手の優れた様子に対して、自分が「負けた」と悟つた時の不愉快な感情を表している。

自分の負けや相手の優越は、相手の仕打ちや行為に因つて生ずる思惑とは裏腹な事態によって感じられるものであるが、また、そのような事態は、自分の行為の失敗によつても生ずる。平安時代の「ねたし」は、自分の行為の失敗によつて、自らの「負け」を悟つた時の不愉快な感情をも表している。

12、ねたきもの 人のもとにこれより遣るも、人の返りごととも、書きてやりつるのち、文字一つ二つ思ひなほしたる。とみのもの縫ふに、かしこう縫ひつと思ふに、針をひき抜きつれば、はやくしりを結ばざりけり。また、かへさまに縫ひたるもねたし。〔枕草子〕第九五段、「ねたきもの」

清少納言は、この段において、「ねたし」と思うものを列挙している。手紙を出してしまつた後に、書き直したいと思うよう文字を思い出した時、また、急ぎの縫い物を縫い終わつて、糸のしりを結ばなかったり、逆さまに縫つてしまつたことに気づいた時に生じる心情を「ねたし」と表現している。これは、自らの行為の失敗に気づいた時に生じる腹立たしさである。この場合、自分のできる理想像を意識していると考えられるし、または自分の行為と関連する他者を意識しているとも考えられる。この時失敗を犯した自分自身に腹を立てているのが「ねたし」である。

13、ひとつたにことこのあかねば、いまひとつ、

とくとおもふふねなやますはわがためにみづのころのあさきなりけりこのうたは、みやこちかくなりぬるよるこびにたへずして、いへるなるべし。あはちのこのうたにおとれり。「ねたき。いはざらましものを。」とくやしがるうちに、よるになりてねにけり。〔土左日記〕、五三頁

14、「さても、あさましう、心つよかりつる人の心かな。さばかり思にては、後の逢瀬よにあらせじ物を、などしつるおこがましさぞ」とおぼすが、いみじくねたきに、恋しさ、とりもあへず〔夜の寢覚〕、二二七頁

例13は、自分の詠んだ歌が、淡路のおばあさんに劣つているのを自覚し、詠まなければよかつたと後悔している。「しまつた！するんじやなかつた」という思いである。例14は、寢覚の上をむなしく帰してしまつた帝が、それを後悔する場面である。いずれも、自分の行為に対して腹を立てている。例13の場合は、淡路のおばあさんに対して「負け」を悟り、例14の場合は、帰つていった落窪に対して「負け」を悟つていたのである。

平安時代の「ねたし」には、自分が「ねたし」と思うぐらい相手（対象）が素晴らしいという意味を表現する例が見られる。これは、「はづかし」などにも見られる用法であり、主として連体修飾語として用いられる場合に現れる。

15、入道の宮の御琴の音を、たゞいまの、又なきものに思ひきこえたるは、「いまめかしう、あなめでた」と、きく人の、心ゆきて、かたちさへ思ひやらるゝ事は、げに、いと限りなき、御琴の音なり。これは、あくまで弾きすまし、心憎く、妬き音ぞまされる。〔源氏物語〕二、明石、八九頁

16、「古代の歌詠みは、唐衣、袂濡るるかごとこそ離れねな。まるもその列ぞかし。さらに一筋にまつはれて、今めきたる言の葉にゆるぎたまはぬこと、妬きことははたあれ。（略）」とて、をかしく思いたるさまぞいとほしきや。〔源氏物語〕三、玉鬘、一三二頁

例15は、明石の上が演奏する琴の音に対する形容であり、例16は、末摘花の歌に対する皮肉な評価として用いられている。この場合、「穢にさわるほど素晴らしい、立派な」と現代語訳することができる。

さて、右に見てきたように「ねたし」は、上代から平安時代を通して「相手の仕打ちや行為、あるいは、相手の優れた様子に対して、自分の負け（相手の

優越)を悟った時の痛切な怒りに似た心的状態」という意味で用いられており、さらに、平安時代中期頃(十世紀はじめ)から、「自分自身の失敗によって、自らの負けを悟った時の痛切な怒りに似た心的状態」という意味でも用いられるようになったことが理解される。さらに、連体修飾語として、平安中期末から平安後期初頭(十世紀末から十一世紀はじめ)には、「ねたし」と思われるくらい「素晴らしい」という意味が加わったと考えられる。

人が、「してやられた」「負けた」と思うのは、そんなことをするはずもないような相手や、勝てると思っていて相手に対して思うのではないだろうか。あらかじめ、相手の仕打ちを予想していたり、自分の負けを予想していたりする場合には「してやられた」とは思わないし、負けたことで相手をいまいましく思ったりはしない。平安時代の「ねたし」の例を見ると、そんな仕打ちをするはずもない相手や、勝てると思っていて相手に対して向けられることが多い。例1では橘の花が散る頃に来るとは思わなかったほととぎす、例2ではあくまで臣下であるはずの蘇我馬子、例3では子どもを奪うなどは考えてなかった驚、例4では自分を追い出すとは思わなかった夫、例5では前世で自分たちを殺すという明らかに罪を犯している男、それぞれに「してやられた」「負けた」と思っているのである。例6でも、かぐや姫は、くらもちの皇子に負けるとは思ってもいなかったのである。このように、「ねたし」は、「勝てると思っていた相手に負けた」時に生ずる心的状態を表現していると思われることができる。このことが、現代語の「ねたましい」における「憎悪の対象は心理的に対等に立っている立場の者であることが原則で、絶対的な相違がありすぎて比較対照しにくいものや、はっきり目上や目下だとわかっている人については用いないことが多い」という特徴につながるのではないかと考えられる。

第二節 中世における「ねたし」の意味

中世の文学作品には、「ねたし」とともに「ねたまし」の例が出現する。しかし、調査した文献には「ねたし」「ねたまし」ともにその数は少ない。文献別に用例数をまとめると、次の表のようになる。

作品	ねたし(ねたさ)	ねたまし
方丈記		
新古今和歌集	1	
発心集	2	
愚管抄	1	
宇治拾遺物語	7	
保元物語	1(3)	
平治物語		
平家物語	1	
古今著聞集	2	3
選集抄		
とはずがたり	1	
徒然草		
太平記		
曾我物語	(1)	
増鏡	2	
義経記		
御伽草子		
天草版平家物語	1	
天草版伊曾保物語		

注II()内は名詞「ねたさ」の用例数。

その用例は、以下のようなものである。

1、うき雲にかくれてとこそ思ひしか ねたくも月のひまもりにける(『新古今和歌集』一五〇一番)

2、(肥後の国の僧は)終り思ふさまにめでたくして、西に向きて息絶えにけり。さてしもあるべきならねば、とばかりありて(肥後の国の僧の)妻に此の事を告ぐ。即ち、驚きまどひ、おびたたしく手をたたきて、眼をいからかし、もだへ迷ひて絶え入りぬ。

人おちて、近付きも寄らざりける間に、一時ばかりありて、世に恐ろしう、声のあるかぎりをめき叫びて云ふやう、「我、狗留孫の時より、此

- やつが菩提を妨げんために、世々生々に妻となり、男となり、さまざま親しみたばかりで、今まで本意の如く随ひつきもたりつるを、今日すでに逃がしつる。ねたきわざかな」と云ひて、齒をくひしぱり垣壁をたたたく。〔『発心集』巻四、一七七頁〕
- 3、昔、目蓮尊者、広野を過ぎ給ひけるに、恐ろしげなる鬼、槌を持ちて白き骸を打つあり。あやしとおぼして問ひ給ふに、答へて云はく、「此れは、おのれが前の生の身なり。我が世に侍りし時、此の骸を得し故に、物に貪じ、物を惜しみて多くの罪を造りて、今は餓鬼の身を受けたり。苦をうくる度に、此の骸の如ううらめしければ、常に来て打つなり」と云ふ。〔『発心集』巻七、三三二頁〕
- 4、コノ小松内府ハイミジク心ウルハシクシテ、父入道ガ謀叛心アルトミテ、「トク死ナバヤ」ナド云ト聞ヘシニ、イカニシタリケルニカ、父入道ガ教ニハアラデ、不可思議ノ事ヲ一ツシタリシナリ。子ニテ資盛トテアリシヲバ、基家中納言壻ニシテアリシ。サテ持明院ノ三位中将トゾ申シ。ソレガムゲニワカ、リシ時、松殿ノ撰録臣ニテ御出アリケルニ、忍ビタルアリキヲシテアシクイキアヒテ、ウタレテ車ノ簾切レナドシタル事ノアリシヲ、フカクネタク思テ、関白嘉応二年十月廿一日高倉院御元服ノ定ニ参内スル道ニテ、武士等ヲマウケテ前駟ノ髻ヲ切テシナリ。〔『愚管抄』巻五、二四六頁〕
- 5、(隣の家の女は、石を投げて雀にぶつけ、腰を折った。その雀をとつて、餌や薬を食わせて治した。)雀の、腰をうち折られて、ねたしと思て、よろづの虫どもをかたらひて、いれ入たりけるなり。〔『宇治拾遺物語』第四八段、一四六頁〕
- 6、(川上から流れてくるものに抱きつけと言われたが、最初に流れてきた大蛇には恐ろしくて抱きつけなかった。次に流れてきた猪も恐ろしかったが抱きついた)はしりよりて、いだきてみれば、朽木の三尺ばかりあるを抱きたり。ねたく、くやしきことかぎりなし。〔『宇治拾遺物語』第一〇六段、二五九頁〕
- 7、(算術の師である唐人のことば)「この算の道には、病する人を置きやむる術もあり。又病せねども、にくし、ねたしと思ふものを、たち所に置き殺す術などあるも、さらに惜しみかくさじ。……」〔『宇治拾遺物語』第一八五段、四〇七頁〕

- 8、(義朝の乳母子である鎌田次郎の弓矢に左の頬先を傷つけられた為朝は、鎌田を追つていくが)三町計追たりけれ共、たゞのびに延ければ、「ねたさはねたけれども、是に限るまじ。判官殿は老体にて、合戦も思ふやうにし給はじ。……ながをひして、判官殿をしへだてられ、あしかりなんと、おぼつかなく覚」て、とつてかへす。〔『保元物語』中、一〇七頁〕
- 9、(同僚の遊女に浮氣した法師に対する遊女金のことば)「わ法師めが人あなづりして、人こそあらめ、おもてをならべたる物に心うつして、ねたきめ見するに、物ならはかささん」と云て、〔『古今著聞集』巻十、三〇四頁〕
- 10、女房の方には、いと堪へがたかりしことは、余りに、わが御身一つならず、近習の男たちを召し集めて、女房たちを打たせおはしましたるを、ねたきことなりとて、東の御方と申し合せて、十八日には御所を打ちまらせむといふことを談義して、十八日に、早朝の供御果つるほどに、台盤所に女房たち寄り合ひて、……〔『とはずがたり』巻二、二八四頁〕
- 11、世には心えぬ事のおほきなり。ともあることには、まづ酒を勧めて、強ひ飲ませたるを興とする事、如何なる故とも心えず。(略)明くる日まで頭痛く、物食はず、によび臥し、生を隔てたるやうにして、昨日の事覚え。公・私の大事を缺きて、患ひとなる。人をしてか、る目を見する事、慈悲もなく、礼儀にも背けり。かく辛き目にあひたらん人、ねたく、口をしと思はざらんや。〔『徒然草』第一七五段、三三二頁〕
- 12、さて六波羅より、この度は世のつねの行啓の儀式にて、持明院殿へ入らせ給。兩院もひくつくるひたる御幸のよしなり。ひしめきたちぬる世の音ないを聞こしめす先帝の御心ち、たとしへなくねたく人わろし。〔『増鏡』、四五五頁〕
- 例1は、密かに女の所に通うことがばれたという歌である。いまましいこととに、雲間から月の光が漏れたというのは、秘密が露見したことをたとえていゝ。例2は、肥後の僧の菩提を妨げようとしてきたのに、その僧は妻の知らぬ間に往生してしまった。そのことを知った妻(実は悪魔)は、齒を食いしばって悔しがらる。その時のことばに「ねたし」が用いられる。僧にしてやられた、いまましいという気持を「ねたし」が表していると解釈できる。例3は、餓鬼の身を受けた鬼が、前世の自分の骸に対して「ねたし」ということばを用いている。餓鬼の姿になったのは、骸の所為である。してやられたという気持と、

敵に対する憎悪の感情が読み取れる。例4は、子息の資盛が松殿に邪険に扱われたことを、父重盛が「ねたく」思ったというのである。松殿の仕打ちに対して、いまいましく思い憎悪したあげくに、その復讐を行ったのである。例5は、「雀の恩返し」の話。隣の欲張り女にわざと石をぶつけられ、腰を折られた上に、数ヶ月の間、籠め置かれたことに対して、ひどい目に合わされた雀が「ねたし」と思っている。すなわち、いまいましく思い、女に対して憎悪の感情を抱いているのである。例6は、恐ろしい猪だと思ったものが実は朽木であったと知り、「してやられた」と思っている。

例2から例5までは、相手への憎悪の気持から、復讐を行っており、かなり激しい気持であることが分かる。例1・6では、本当に仕返しするとは考えられないが、「いまいましく、仕返ししてやりたいくらい」という気持が込められているのであろう。

例7は、殺してしまいたいような相手を「ねたし」と思う人という。例8は、頬先を傷つけた鎌田に対して、為朝が「いまいましい」と思い、報復したいと思っている。例9は、同僚と浮気するなどという仕打ちに対して、「いまいましい」という気持を述べており、実際に足で腰を締め付けたという報復に出ている。例10は、御所様（後深草院）が近習の男たちを集めて、女房たちを粥杖（正月の粥を煮る時に、粥をかき回す棒。この棒で子どものない女の腰を打つと懐妊して男児を産むとされる）で打たせたことを、筆者や東の御方（春宮の生母、藤原愔子）たちが「ねたし」と思って、院に対して仕返しを企むというのである。例11は、酒を無理に飲ませられた人が醒めてから、その仕打ちに怒りを生じるといい、例12は、退位させられた先帝が新旧交替の際、世の中の賑わしい音を聞いて自分を退位させた人々をいまいましく思うのである。

さて、中世の「ねたし」は、基本的に、主体が、相手（対象）から何らかの仕打ちを受け、それに対して仕返ししたいような腹立たしさを感ずる場合に用いられるが、次のように、相手の恵まれた状態に対して用いられ、そのようになりたいというあこがれのニュアンスを汲み取ることもできる例もある。

- 13、佐々木、「あ（こ）ばれ、（此のじん）も内々（ないない）所望する（とき）、し物を」と、き（こ）とおもひ（い）だして、「……（あかつき）暁（あ）た、んとての夜、とねりに心（こころ）をあはせて、さしも御秘蔵候（ごひざう）いけずみ（を）ぬすま（い）てのほりさう（は）いか（に）」といひければ、梶原（かぢはら）この詞（ことば）に腹（はら）が（あ）りて、「ね（こ）たい、さらば、景季（かげすゑ）もぬすむべかりけ

る物を」とて、ど（こ）とわら（て）ての（き）にけり。（『平家物語』下、一六七頁）

この例は、自分が欲しかった馬に佐々木が乗っているのを見て「ね（ツ）たい」という。この場合、相手の恵まれた状態を見て、「してやられた」という気持となり、自分の負けを痛感してのことばであると同時に、自分も佐々木のようになりたいたいという「あこがれ」の気持を読みとることもできる。すなわち、現代語の「ねたましい」に見られる、相手の恵まれた様子にあこがれるというニュアンスが、この時期から現れたと見ることができそうである。『天草版平家物語』でも次のようにある。

- 14、梶原このことばに腹が（あ）りて、ね（こ）ったう（さ）らば梶原も盗（まう）うことであつたものをとどつと笑（う）ての（いた）と申す。（『天草版平家物語』、一三三三頁）

このように、中世の「ねたし」は、平安時代と同じように、「相手の仕打ちや行為、あるいは相手の優れた様子に対して、自分の負け（相手の優越）を悟った時の痛切な怒りに似た心的状態」を表す形容詞であると捉えられる。そして、現代語の「ねたましい」に見られるような、相手の恵まれた状態に対する「あこがれ」のニュアンスを持つような例も、少数ながら現れる。その一方で、平安時代に見られた、自らの行為の失敗に気づいた時に生じる腹立たしい心的状態を表す例や相手の素晴らしい状態を表す用例については、調査した文献には見られなかった。

平安時代の「ねたし」は、本来の「相手の仕打ちや行為、あるいは、相手の優れた様子に対して、自分の負け（相手の優越）を悟った時の痛切な怒りに似た心的状態」という意味とともに、平安中期頃（十世紀はじめ）に「自分自身の失敗によって、自らの負けを悟った時の痛切な怒りに似た心的状態」という意味でも用いられるようになり、さらに、平安中期末から平安後期初頭（十世紀末から十一世紀はじめ）には、連体修飾語として「ねたし」と思われるくらい素晴らしいという意味で用いられるようになるなど、次第にその意味が広がっていった。中世の「ねたし」には、平安時代に広がった意味での使用例が見られないことから、その意味範囲を狭めていったのではないかと考えられる。また、意味を狭めながらも、その一方では、相手の恵まれた状態にあこがれるようなニュアンスを持つような例が出現し始める。今後は、更に調査資料を広げ、

この点を検証しなくてはならないと考える。
 中世では、現代語の「ねたましい」に通じる「ねたまし」の例も『古今著聞集』に見られる。

15、鎌倉前右大将家に、東八ヶ国うちすぐりたる大力の相撲出来て、まうしていは申云く、「当時長居に手向ひすべき人おぼえ候はず。畠山庄司次郎ばかりぞ心にくう候。それとても、ながるをば、たやすくは、いかでかひきはたらかし侍らん」と、詞も憚らずいひけり。大将聞給て、いやましう思ひたまひたる折ふし、重忠出来たりけり。〔古今著聞集〕卷十、三〇二頁)

16、大将入 興し給て、「その庭にながめが候ぞ。貴殿と手合をして心見ばやと申候也。東八ヶ国打勝りたるよし自称仕まつる、ねたましうおぼえ候へば、頼朝なりともいで、心見ばやと思給へども、とりわきそこをてこひ申ぞ。心み給へ」とのたまはせければ〔古今著聞集〕卷十、三〇三頁)
 17、同僧正のもと許に、絵かく侍法師ありけり。あまりに好ならひければ、後さまには僧正の筆をも恥ざりけり。此事を、僧正ねたましくやおもはれけん、いかにも失を見出さんとおもひ給処に〔古今著聞集〕卷十一、三一六頁)

例15は、大系本の底本の本文では「いやましう」とあるが、異本注記によれば「此事ねたましう」とある。例16とも合わせて考えると、大系本の頭注の通り「ねたまし」と解釈すべきであろう。相撲取の長居の傲慢で、誰憚ることのない話に、頼朝が「ねたまし」と思ったというのである。傲慢な話、態度がいまいしく、癪に障ったのであろう。何とかしてこの癪な長居の鼻をへし折ってやりたいという思いをこの「ねたまし」が表していると解釈できる。語形としては現代語の「ねたましい」に通じるが、意味の上では、現代語のように、相手の恵まれた状態にあこがれるというニュアンスは見られない。

例17では、師匠である自分を超えるほどの腕前となった弟子を見て、「ねたまし」と思うのである。何とかして欠点を見つけて、ギャフンと言わせてやりたい気持ち表れている。この場合、相手にしてやられたという気持ちとともに、「あこがれ」のような気持を認めることができそうあり、現代語の「ねたましい」にかなり近い例であると考えられる。

以上、中世における「ねたし」「ねたまし」の用例について分析してきた。中古からの意味変化と、現代語「ねたましい」に通ずるような意味での使用例を見出すことができたが、用例数が少なく、変化の時期などについて確実なことが言えない。さらに調査範囲を広げ、多くの用例から検証する必要がある。

第三節 「ねたし」の意味分析における課題

本稿では、上代から中世の仮名文学作品を主な資料として、上代における「ねたむ」、上代、中古における「ねたし」、中世における「ねたし」「ねたまし」の意味を分析してきた。その分析の結果、上代から中世の形容詞「ねたし」の意味についてはほぼ解明し得たと考える。しかし、上代で考察した動詞「ねたむ」の意味については、中古以降の考察ができなかった。動詞「ねたむ」の意味は、形容詞「ねたし」「ねたまし」の意味とも密接な関係にあると考えられ、特に「ねたし」の用例を多く抽出することのできなかった中世においては、動詞「ねたむ」の意味分析が必要であった。今後は、中古・中世の動詞「ねたむ」の用例をさらに広く検討し、その意味を解明するとともに、形容詞「ねたし」「ねたまし」との関係性を明らかにしたい。

また、中古では多くの用例が見られる「ねたし」は、中世以降になると、それほど多くの用例を見なくなり、現代語では、全く用いられなくなる。その一方で、新たな語形である「ねたまし」が中世になって出現し、現代まで使用されるようになる。それはいかなる理由によるのであろうか。今後に残された大きな課題である。

注

(注1) 石川徹「平安文学語意考証(その三) — おぼゆ・なつかし・くやし・ねたし・くちをし —」。この他に、服部みつ子「源氏物語における類義語—クヤシとネタシの意味の違い—」がある。服部氏は、「ねたし」の意味を「現在、ある状態において、ある人自身やある人の態度に対して、また、自分の失敗に対して反射的に起こる感情」と捉えている。

(注2) 引用は、石塚晴通『圖書寮本日本書紀 本文編』(美季出版社、昭和五五年三月)による。

(注3) 本稿における、「連体修飾語として用いられる場合」とは、「ねたき」「ねたかりける」など名詞を修飾する場合を指し、「述語として用いられる

場合」とは、「ねたし」「ねたかりけり」「……こそねたけれ」など文を切る場合を指す。

(注4) 大系本頭注によれば、学習院図書館本・賀茂別雷神社三手文庫本では異本と同じく「ねたましう」とあるとされる。

補注

本稿の引用文は下記に示す例外は日本古典文学大系本によるが、『日本書紀』は『図書寮本日本書紀 本文編』、『日本霊異記』『源氏物語』『讃岐典侍日記』は日本古典文学全集本、『とはすがたり』は新編日本古典文学全集本、『発心集』は新潮日本文学集成、『撰集抄』は岩波文庫本による。

参考文献

- 石川徹「平安文学語意考証(その三) ―おほゆ・なつかし・くやし・ねたし・くちをし―」『平安文学研究』第十九号、昭和三十一年二月
- 大野晋『日本語の年輪』新潮文庫、昭和四一年
- 遠藤嘉基「『日本霊異記』訓釈攷(承前) ―漢字と訓との関係をめぐる諸問題―」『訓点語と訓点資料』第三八輯、昭和四三年九月
- 服部みつ子「源氏物語における類義語―クヤシとネタシの意味の違い―」『常葉国文』第二号、昭和五一年七月